男女の愛を模した神への祈り

——タミル・バクティの場合——

高橋孝信
（東京大学）

一　はじめに

いわゆる「インド近代文学」史家にとって、バクティと言えばタミルに端を発しているというのは、論をまたないほど当然のことである。例えば、ヒンディー文学史を著したドゥヴィヴェーディは「南インドのヴィシュヌ派の教説こそが、実はバクティ運動の源泉」と明瞭に述べているし[1]、別の論者は「私（バクティ）はドラヴィダ（タミル）の地に生まれ、カルナータカで育ち、マハーラーシュトラで生き、そしてグジャラートで衰弱した」という *Bhagavat Māhātmya* の一節を引いて、バクティの歴史を述べている[2]。それに対し、わが国のいわゆる「インド学」でバクティを説く場合、バガヴァットギーターから一挙に十一世紀のラーマーヌジャに飛び、それから十五～六世紀のヒンディー詩人カビールなどに至るという具合で、六～九世紀を中心としたタミル・バクティはすっかり抜け落ちるのが普通である。

そこで本稿では、これまでの概説で欠けていたタミル・バクティの一端を、その祈りがタミル古典恋愛文学（後一

〜三世紀）を模していることに焦点を絞って紹介し、あわせて、タミル・バクティ研究の課題を述べることとする。なお、紙幅の制限で、本来本稿に載せるべき資料の大部分を割愛するが、それらは本稿で示す文献を参照していただきたい。[3]

二　タミル・バクティ（後六〇〇〜九〇〇年）の概要[4]

タミル・バクティの概略を示すと以下のようになるであろう。

（一）まず第一に、タミル・バクティは、インドのバクティ史上はじめての**実践的宗教運動**であったことである。つまり、それまでのバクティが理念的なものであったのに対し、タミル・バクティにおいてはじめて実生活と結びついた宗教運動となったということである。このことは、どんなに強調しても強調しすぎということはないであろう。

（二）タミル地域でバクティが広まった原因についてはさまざまな主張がなされているが、[5]結論から言うと、その前時代（四〜五世紀）に栄えたジャイナ教や仏教に対する、[6]ヒンドゥー教側からのリバイバル運動である。したがって、バクティの詩人たちはジャイナ教や仏教に露骨な敵愾心を抱き、それらを徹底的にこき下ろしている。他方、そのために、バクティ文献は七〜八世紀ごろのジャイナ教徒や仏教徒の実際の様子――例えば、ジャイナ教徒は素っ裸であり、口が臭く、変な言葉を語る（北方方言が混じっていた?）とか、仏教徒は重衣を纏っているなど――を伝える貴重な資料ともなっている。

（三）バクティ運動が盛んになる六〇〇年ごろを境に、タミルの言語・社会・文化は大きく変容する。すなわち、言語は古タミル語から中期タミル語に変わり、社会はヒンドゥー化しはじめ、寺院が生活のさまざまな分野で重要な

ものとなる。なお、シヴァ派とヴィシュヌ派とは、当初反ジャイナ教・仏教で歩みをともにするが、それらの勢力が駆逐されると、後には互いに敵対するようになる。[7] ちなみに、タミル地域では伝統的にシヴァ派が多い。六〜九世紀ごろのシヴァ・ヴィシュヌ両派の人口は分からないが、記録の残る十九世紀末から今日の統計によると、シヴァ派が人口の五〜六割、ヴィシュヌ派が二〜三割である。

（四）タミル・バクティでの祈りの形態・特徴をまとめると、つぎのようになる。（ア）神の祭ってある聖地を、信者は聖者とともに巡り、聖者の作った讃歌をともに歌い上げた。これら聖地の多くは当初は小さな祠のようなものであったが、パッラヴァ朝（六〜九世紀）やチョーラ朝（九〜十三世紀）を中心に、そこに壮大な寺院が建立される。彼ら聖者が作った讃歌は後に編纂され、それぞれシヴァ派聖典（*Tirumuṟai*）、ヴィシュヌ派聖典（*Divyaprabandha* または *Tiviyappirapantam*）となる。ちなみに、伝統的に、シヴァ派では六十三人の聖者（nāyaṉār）を、ヴィシュヌ派では十二人の聖者（āḷvār）を数え上げるが、シヴァ派六十三聖人の大部分は、同聖典の作者とは関係のない七世紀以前の伝説的人物である。（イ）聖者は、一般信者の模範的存在であるか、あるいは同じ信者（バクタ）として神の前では一般信者とは仲間である。また、信者同士も、神の前では対等・平等な関係である。（ウ）神とバクタ（聖者も含めた信者）との関係がどうであるかと言えば、主と僕（しもべ）、王と家臣、男と恋人、そして、まれに友人同士というような場合もある。[8]

さて、最後に述べたことであるが、神とバクタとを、男とその恋人として描く場合はもちろん、主と僕として描く場合も、古典恋愛文学の手法に倣う場合が多い。そこで、次節では、まずタミル古典恋愛文学について概観し、ついで第四節では、バクティの作品と古典恋愛文学とを比較してみることにする。

三　タミル古典恋愛文学（一～三世紀）の概要[9]

タミル古典文学は、インド南端部（今日のタミルナードゥとケーララ両州に相当する地域）で紀元後一～三世紀を中心に花開いた詩文学で、四七〇余の詩人の手になるさまざまな長さ（三～七八二行）の恋愛詩や英雄詩二三八一が今日に伝えられている（うち、恋愛詩が全体の八割を占める）。これらの作品は、のちに主題・韻律・長さなどから『エットトゥトハイ（八詞華集）』と『パットゥパーットゥ（十の長詩）』という詞華集に編まれた。伝説によると、詩人たちは古代パーンディヤ王朝の首府マドゥライに存在した宮廷文芸院サンガム（仏教でいうサンガ［僧伽］と同起源の語）で、規範書である文法書・詩論『トルハーピヤム』（*Tolkāppiyam*）（一～五世紀頃）を学び、詩作を競ったと言う。この伝説（サンガム伝説）[10]が示すように、古典文学（ことに恋愛文学）はさまざまな約束事からなる高度に様式化した文学である。その約束事の一端を示すと以下のようになる。

（一）詩人は自分の恋情を歌うのではなく、登場人物の一人に仮託して恋を歌い上げる。

（二）登場人物、およびその各々の役割が決まっている。主な登場人物は、女（ヒロイン）、女の友人（以上で作品の約八〇％）、男（ヒーロー）（一〇％強）、女の実母と乳母、遊女（これらで約五％）などである。各々の役割は、女がつねに恋の悲哀・苦悩を訴えるのに対し、その友人は、いつも女と一心同体となって女を励まし、また逢引の約束をはじめ男との間を取り持つ。男とその友人は、恋の苦悩を訴える男に対して、友人は男たるものの義務を説く。女と遊女（高級遊女）は、男をめぐって互いにライバル関係、という具合である。

（三）テーマ（登場人物の誰が、誰に、いつ、どこで、どのような状況で、なにを語るのか）は決まっている。テーマ

は全体で約五〇〇あり、それらを、出会いから、昼または夜の逢引、それらの妨げ、結婚の催促、結婚、結婚後のさまざまな別れ（富の獲得、戦い、遊女のため）、再会というように時系列に並べると、あたかも一つの恋物語のようになる。

（四）個々の作品は、その恋物語の一局面、すなわち一つのテーマしか描かない。例えば、第四節で見る *Kur-untokai* 一五五なら、その前後のテーマである「雨季には必ず戻ると言って、男が女を励ます」あるいは「男が戻っての女の喜び」は、別の作品が描く。

（五）これらのテーマの基本的なものは、作品に描きこまれた場所（山地、海岸など）、季節、時間、動植物などのキーワードによって類推される。それは、ちょうど俳諧で季語がある季節や情感を連想させるのに似ていて、タミル恋愛文学では、作品に描きこまれた地勢・季節・時間・動植物などが作品の主題を連想させる仕組みとなっている。そして、われわれには「四季」が重要であるように、タミル人にとっては、五つの地域――山岳、海岸、荒れ地、牧地、田園――が重要で、これら五つが恋愛文学のジャンルを構成している。なお、これらのジャンル名はそれぞれの土地に固有の花の名である。

「恋愛文学の五つのジャンル」一覧表(11)

ジャンル名	**クリンジ**	**ネイダル**	**パーライ**	**ムッライ**	**マルダム**
場所	山地	海辺	荒れ地	森林／牧地	田園
季節	寒期／冬前期	［特になし］	冬後期／夏	雨季	［特になし］
時間	真夜中	黄昏時	真昼	夕方	早朝
	日中	午後／夜半			日中

動物	猿、象、虎	鮫、ワニ	象、虎、トカゲ	鹿	水牛、鯉、鰻
	蜂、コブラ	エビ	ジャッカル	牛、羊	
植物	竹、パラミツ	punnai、tāḷai	ōmai、yā	konrai	マンゴー
	vēṅkai、サンダル	neytal、nāḷal		ムッライ	
鳥	孔雀、オオム	サギ、水鳥	野鳩、鷲	野鶏	サギ
	フクロウ	（カモメ）	ハゲタカ		（ツル）
主題	結婚前の恋の諸相	結婚前の恋の諸相	別れ、駆落ち	別離と帰りを待つ妻の不安	遊女のための別れと妻の不機嫌
結婚の前後	結婚前	結婚前	結婚前・後	結婚後	結婚後

右の表は、おのおののジャンルに固有の地勢・季節・時間・動植物、および関連する主題を一覧表にしたものである。なお、表に出る語はジャンルを示すキータームとなるが、一つの作品に出るキータームは一つだけの場合も複数の場合もある。例えば、「パラミツ（波羅蜜）」という語が出ただけでも、その作品はクリンジ・ジャンルに属し、山地を舞台にして結婚前の諸相を主題としていることが知られるのである。

四　古典恋愛文学とバクティ讃歌

では、バクティの作品を古典恋愛文学と比較して見てみよう。まず、ヴィシュヌ派の讃歌、ことにクリシュナ讃歌を見てみることにする。というのも、牧童クリシュナを慕う牧女という設定は、古典のムッライ・ジャンル――牧地の雨期の夕刻を背景とし、女が旅から帰る夫を待つことが中心的主題――の設定そのままであり、比較として分かりやすいからである。

つぎの作品はヴィシュヌ派最大の詩人と言われるナムマールヴァール（Nammāḻvār　九世紀）の作品である（*Tiruvāymoḻi*『聖なる真実の言葉』9.9.10）[12]。

夕暮れが訪れた。が、黒き人（クリシュナ）は来ない。
　力強き雄**牛**が、大きなベルを鳴らしつつ交わる、色姿の美しい雌**牛**はじゃれ、
〔放った羊を集める〕鋭い**笛**の音が鳴り響いているのに……
蜂が、輝くたわわなムッライ（ジャスミン）から大きく開いた茉莉花へと移動し、
　羽音を立て、それが中空に砕け、嘆いているかのような音を響かせているのに……
ああ、**あの人がいない**のに、ここで私はなにを語り、どう生きよう。

この「夕刻がやってきたのに、待ち人は来ない（だから、私〔女〕は生きられない）」というのは、ムッライ・ジャンルの典型的なテーマであり、牧地の夕刻の描き方も古典のそれと寸分違わないほどそっくりである。つぎの古典恋愛文学の例（*Kuṟuntokai*　一五五）[13]を見ていただきたい。

穀物畑を耕し、賑やかな**農夫**たちが
　〔空になった〕種入れの子篭を花の蕾で満たして戻る
夕暮れがやって来た。だが、
　鍛冶場の吹子のかたわらの、蠟の沢山入った壺のような
「口の広いベルの音を、木の生い茂った**森**に響かせつつ、
晩餐をとるために、あの人の車がやって来る」と伝える言葉は、まだ来ない。

つぎに、シヴァ派の讃歌であるが、例として取り上げたのは、初期三聖人の一人で、ジャイナ教徒を駆逐したことで有名なサンバンダル（Campantar 七世紀）の作品である（*Tēvāram* I. 130. 1）。

ああ、聖地ティルヴァイヤール（Tiruvaiyāru）！

五感が混乱し、歩むべき道に惑い、智慧が滅び無気力となり苦しむとき、

「恐れるな」と言って、恩寵を施してくれる方（シヴァ）がおわす

その寺では、

女たちが右遶しつつ踊るのに、太鼓を鳴らすと、

雌**猿**たちが**雷鳴**と勘違いして恐れ、木に登り雲を見やっている。

この例でも明らかであるが（ことに最後の二行）、ヴィシュヌ讃歌と比較すると、シヴァ派の讃歌では、古典恋愛文学の常套句のみを取り入れる傾向が強い。つぎの古典作品（*Kuṟuntokai* 一五三）を見ていただきたい。

山で大きな**オオム**が鳴くたびに、そして

前庭の**波羅蜜**の黒い枝を大きな黒**猿**が跳び渡るたびに、

可哀想に私の心は恐れおののいていた。

しかし今や、漆黒の**真夜中**に、

［心は］**山腹の長い道**をやって来るあの男（ひと）のところへ行ってしまった。

これら二つの作品に共通するのは、女が男を（信者が神を）切ないほどに想っていること、それに、クリンジ・ジャンルに特有の山地の様子、ことにそこに住む猿の様子である。本来であれば、山地を背景とし、結婚前の恋の諸相

を描くクリンジ・ジャンルの設定をそのまま模してシヴァ神に讃歌を捧げれば、より効果的であったであろう。しかし、シヴァ寺院の大半はカーヴェーリ河畔の田園地帯、すなわち古典の「マルダム地域」にある。古典のジャンル設定をそのまま用いれば、遊女のための別れが主題となるために、クリンジ・ジャンルでよく用いられる表現のみを用いたのである。(14)

五　むすび——今後の課題——

タミルのバクティ讃歌の多くが、古典恋愛文学の手法に倣っているという指摘はこれまでにも度々なされており、ここで紹介したことは決して新しいものではない。しかし、なぜバクティ讃歌に古典恋愛文学の伝統を取り入れたのか、その効果はどうだったのかなどについては、これまでの研究ではほとんど言及がない。

第三節で古典文学の約束事の一端を示したが、高度に様式化した古典文学を理解するためにはかなりの時間と訓練を要するから、本稿程度の紹介でその全容を理解することは到底できない。したがって、筆者のように古典文学を専門とする者なら、第四節に示したバクティ文学の二つの例が、主人公が男(ヒーロー)から神に代わっただけというくらい、古典文学とそっくりに見えても、タミル古典に通じない者にとっては、バクティ文学と古典文学にはたしかに同じような言い回しが出てくるものの、どこがそれほど「そっくり」なのか分からないであろう。

実は、同じことがバクティ文学の作者（聖人）と一般信者との間にもあったと思われる。すなわち、作者たちが古典文学に深く通じていたことはすでにみたとおりであるが、一般信者は高度に様式化した古典の伝統などほとんど分からず、分かったことは、せいぜいが恋情が示されていることと、親しみのある地勢と動植物などの描写だけであっ

たろう。だとすると、古典恋愛文学を模した聖者たちの讃歌は、一般信者にはあまり効果がなかったということになりそうである。

しかし、ことはそう簡単ではない。筆者はこの数年、文献学的手法ではどうしても読めないテキストの存在が気になっていた。バクティ文献もその一つである。それについては別稿でやや詳しく論じているので[15]、ここでは結論のみを記すが、それらのあるものはテキスト伝承に問題があるために、またあるものは人形劇等の劇の台詞、あるいはバクティ文献の場合のように、歌の歌詞であるために、文献学的手法では読めないのである。

われわれは、バクティ讃歌を「文献」として読み、「歌」であることを忘れている。「歌」というのは、童謡を歌う子供、習ったことのない外国語のポップスを聞く若者を見れば明らかであるが、歌詞の内容が分からなくとも楽しめるし、またなんらかの情動を呼び起こすものである。ましてや、古典恋愛文学を模したバクティ讃歌の場合、親しみのある地勢や動植物が描かれ、その内容は何人にも分かる恋歌である。たとえ、そこに古典の伝統を読み取れなかったとしても、一般信者が引きつけられないわけはない。

さて、古典の恋歌を模した讃歌が一般信者に一定の効果をもたらしたとして、詩人（聖者）たちは、そもそもなぜ讃歌に恋歌を取り入れたのであろうか。しばしば指摘されるように、バクティ（bhakti）という言葉自体が、特定の相手との親密なる関係、ことに「愛」を包含する。そこで、バクティの聖者たちは、自分たちの古典の恋愛文学の伝統を取り入れ、神への愛を歌い上げたとも考えられる。しかし、この考え方はあまりに短絡的である。まず、初期のシヴァ派バクティ文献（*Teváram* 七～八世紀）では、古典の常套句は頻繁に用いるが、神を讃嘆こそすれ、神への愛を歌い上げることは稀で、神への愛を古典の手法そのままに本格的に歌い上げるのは、九世紀ごろのヴィシュヌ（ク

リシュナ）讃歌以降である。他方、古典では神へのバクティ讃歌は存在しないが、土着神のムルガン（後にスカンダと同一視される）を描くときには、ある種の親しみがこめられている。さらに、古典期とバクティ期との間頃（五～六世紀）の作品と思われる宗教詩、『ムルガン神への誘い』（*Tirumurukāṟṟuppaṭai*）や『パリパーダル』（*Paripāṭal*）では、かなりの程度古典恋愛文学を模倣している。ことに、ヴィシュヌ神やムルガン神等を描く後者は、風景描写だけでなくテーマまで古典を模し、神に対してかなり情感的な親しみを込めている。バクティ讃歌には、このようなものが伏流としてあったはずである。

バシャムの言うごとく、タミル・バクティは「今日あるヒンドゥー教にもっとも大きな影響を及ぼした」[16]。今日のヒンドゥー教の源泉としてのタミル・バクティの本質について、さらなる研究が求められる。

註

（1） H. ドゥヴィヴェーディ（坂田・宮元・橋本訳）『インド・大地の讃歌―中世民衆文化とヒンディー文学』、春秋社、一九九二年、一〇三頁。

（2） A. S. Kedilaya, “Bhakti Literature in Kannada”, *Journal of the Institute of Asian Studies*, 3. 1, Institute of Asian Studies, Madras, p. 113.

（3） タミル文学史全般に関しては、拙稿「タミル文学への手引き」（『江島恵教博士追悼論集空と実在』、春秋社、東京、二〇〇〇年、五二三–五三八頁）があり、そこに挙げた書を参照して欲しい。それと重複するが、文学通史としては以下のような書がある。C. & H. Jesudasan, *A History of Tamil Literature*, Y. M. C. A. Publishing House, Calcutta, 1961: S. Vaiyapuri Pillai, *History of Tamil Language and Literature: Beginning to 1000 A. D.*, New Century Book House, Madras, 1956: K. V. Zvelebil, *The Smile of Murugan: On Tamil Literature of South India*, E. J. Brill, Leiden, 1973: K. V. Zvelebil, *Tamil Literature* (*Handbuch der Orientalistik*, Zweite Abteilung, 2. Band, 1. Abschnitt), E. J.

Brill, Leiden, 1975: K. V. Zvelebil, *Lexicon of Tamil Literature* (*Handbuch der Orientalistik*, 2 Abteilung, Indien, Band 9), E. J. Brill, Leiden/New York/Köln, 1995.

（4）タミル・バクティ関係の研究書を、翻訳を中心に挙げておく。S. Satyamurthi Ayyangar, *Tiruvāymoḻi: English Glossary*, Ananthacharya Indological Research Institute, Bombay, Vols. I & II/Vols. III & IV, 1981: *Cants dévotionnels tamouls de Kāraikkālammaiyār*, Edition et traduction par Karavelane, Introduction par Jean Filliozat; (Nouvelle edition) Postface et index-glossaire par François Gros, Institute Français D'indologie, Pondichéry, 1982: John Carman and Vasudha Narayanan, *The Tamil Veda: Piḷḷān's Interpretation of the Tiruvāymoḻi*, University of Chicago Press, Chicago/London, 1989: Norman Cutler, *Songs of Experience: The Poetics of Tamil Devotion*, Indiana University Press, Bloomington/Indianapolis, 1987: Vidya Dehejia, *Āṇṭāḷ and Her Path of Love, Poems of a Woman Saint from South India*, State University of New York Press, New York, 1990: Jean Filliozat, *Un Texte Tamoul de Dévotion Vishnouite: Le Tiruppāvai d'Āṇṭāl*, Institute Français D'indologie, Pondichéry, 1972: Francois Gros, *Le Paripāṭal: Textes tamoul, Introduction, Traduction, et Notes*, Institute Français D'indologie, Pondichéry, 1968: J. M. S. Hooper, *Hymns of the Āḻvārs*, Oxford Unversity Press, 1929: F. Kingsbary and G. P. Phillips, *Hymns of the Tamil Saivite Saints*, Sri Satguru Publications, Delhi, 1988 (reprint: 1st ed. Calcutta, 1921): Vasudha Narayanan, *The Vernacular Veda: Revelation, Recitation, and Ritual*, University of South Carolina Press, 1994: Indira Viswanathan Peterson, *Poems to Śiva, The Hymns of the Tamil Saints*, Princeton University Press, Princeton, 1989: G. U. Pope, *The Tiruvāçagam, or 'Sacred Utterances' of the Tamil Poet, Saint, and Sage Māṇikka-vāçagar* (reprint; 1st ed. Oxford at the Clarendon Press, 1900), University of Madras, Madras, 1979: T. N. Ramachandran, *Tirukkovaiyar*, Tamil University, Thanjavur, 1989: T. N. Ramachandran, *Periya Puranam*, 2 parts, Tamil University, Thanjavur; Part I, 1990, Part II, 1995: David D. Shulman, *Songs of the Harsh Devotee: The Tēvāram of Cuntaramūrttināyaṉār*, Dept. of South Asia Regional Studies, University of Pennsylvania, Philadelphia, 1990.

（5）これについては、K. V. Zvelebil, *The Smile of Murugan*, pp. 191 ff. を参照のこと。

（6）バクティ文献では、ジャイナ教徒は camaṇar/amaṇ（<śramaṇa 用例多数）、piṇṭiyar（<Asoka tree）、仏教徒は

cākkiyar（<śākhya）、puttar（<Buddha）、pōtiyar（少数）、piṭakar（一～二例）などと呼ばれている。

（7） カンナダ地方でも事情は似ている。すなわち、十二世紀にバサヴァ（Basava）が出てヴィーラ・シヴァ派（あるいはリンガーヤト派）が確立すると、それ以降、文学の担い手の中心はジャイナ教徒からヒンドゥー教徒になり、カンナダ語は古層カンナダ語から中期カンナダ語になる。なお、バサヴァの作品については、A. K. Ramanujan, *Hymns for the Drowning: Poems for Viṣṇu by Nammāḻvār*, Princeton University Press, Princeton, 1981 を参照のこと。

（8） 神を友人のように扱う顕著な例が、しばしば「傲慢な信者」と呼ばれるシヴァ派聖人スンダラル（Cuntarar 七～八世紀）である。彼の作品については、Shulman, *Songs of the Harsh Devotee* を参照のこと。

（9） タミル古典恋愛文学のさまざまな約束事については、高橋孝信「タミル古典文学の基礎的研究―恋愛文学の術語：*Kuṟuntokai* の詞書から―」（『西南アジア研究』二二、西南アジア研究会、一九八四年）や、高橋孝信訳注『ティルックラル―古代タミルの箴言集』（平凡社・東洋文庫、一九九九年）の「解説」部分に、より詳しい記述がある。Takanobu Takahashi, *Tamil Love Poetry and Poetics* (*Brill's Indological Library* No. 9), Leiden/New York／Köln, E. J. Brill, 1995 もあるが、やや専門的に過ぎる。古典文学の代表的な紹介および訳としては、J. V. Chelliah (tr.), *Pattuppattu: Ten Tamil Ldylls*, S. I. S. S. W. P. S. Madras, 1962; G. L. Hart, *Poets of the Tamil Anthologies: Ancient Poems of Love and War*, Princeton University Press, Princeton, 1979; A. K. Ramanujan, *Poems of Love and War, From the Eight Anthologies and the Ten Long Poems of Classical Tamil*, Columbia University press, New York, 1985 などがある。

（10） 「サンガム伝説」については、拙稿「タミル古代の文人たちのサンガ―伝 Nakkirar の注釈をめぐって―」（『東洋文化研究所紀要』第一一四冊、東京大学東洋文化研究所、平成三年、八七―一三二頁）を参照していただきたい。

（11） この他、それぞれのジャンルを示すキータームとしては、「神」「食べ物」「楽器」「旋律」「町村」「人々の職業」などがあるが、ここでは作品に現れる頻度の高いものだけを示した。

（12） Ramanujan と Cutler によると、*Tiruvāymoḻi* の作品の三分の一以上で古典恋愛文学の設定を模しているという（A. K. Ramanujan and Norman Cutler, "From Classicism to Bhakti", *Essays on Gupta Culture*, ed. Bardwell L. Smith, Motilal Banarsidass, Delhi, 1983, p. 198）。

（13）『短詩集』。「八詞華集」の一つで、四～八行の恋愛詩四〇〇を集めたもの。

（14）反面、シヴァ派の詩人は、一連の詩で神との恋物語を描くテーマベースの作品を生み出した。代表的なものは、シヴァ派で最も偉大な詩人 Māṇikkavācakar（九世紀頃）に帰せられる *Tirukkōvaiyār* で、信者と神との出会いをはじめとした一連の恋愛文学のテーマを、四〇〇詩で描く。

（15）“Before Grammar: Issues in Reading Some Classical Tamil Texts”, *Kolam* (Electric Journal of the Institute of Indology and Tamil Studies, University of Cologne; http://www.fas.nus.edu.sg/journal/kolam/index.htm), Vol. 9 & 10, Köln, 2003.

（16）A. L. バシャム著、日野紹運・金沢篤・水野善文・岩上和敬訳、『バシャムのインド百科』、山喜房佛書林、平成十六年、二九五頁。